



おもすの森

発行
大本山 本門寺根源
山務庁
富士宮市北山4965
電話 0544-58-1004

日蓮大聖人

御聖訓

『重須殿女房御返事』

(弘安四年 正月五日)

十字(むしもち) 一百まい・か
しひとこ(菓子一籠) 給ひ了んぬ。
正月の一日は日のはじめ、月の始め、としのはじめ、春の始め。
これをもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく、日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく、とく(徳)もまさり人にもあいせられ候ふなり。

〔中略〕

今日本国の法華經をかたきとしてわざわいを千里の外よりまねきよせぬ。これをもつてをもうに、今また法華經を信ずる人はさいわいを万里の外よりあつむべし。影は体より生ずるもの、法華經をかたきとする人の国は、体にかげのそうがごとくわざわい来たるべし。法華經を信ずる人はせんだんにかをばしさのそなえたるがごとし。またまた申し候ふべし。

【現代語訳】

むし餅百枚、果物一籠(かご)頂戴いたしました。お礼申し上げます。正月の元日は、日の始め、月の始め、年の始め、春の始めです。この日を大切にされる人は、たとえば月が西から東をさして満ちていくように、日が東から西に渡って照らすように、内には人徳を積み、外には人から敬愛されるのです。

〔中略〕

今、日本国の人々は、法華經を敵としたために患(わずら)いを千里の外から招き寄せてしましました。このことから推し測ると、今、法華經を信じている人は、幸せを万里の外から集めることができるでしょう。影は体によつてできるものですが、法華經を敵とする人の国は、体に影が付き添っているように、患いがいつもつきまとうことでしょう。その反対に、法華經を信ずる人は、ただでさえ香りのよい梅檀にいつそうの香ばしさを添えたように、すばらしい功德を得られることと思えます。今日はこの辺にして、またお便りします。

※参考・『日蓮聖人全集』

恭賀新年

新春を慶び 謹んで年頭の御挨拶を
申し上げ 皆さまの御健康と御多祥
を御祈り申し上げます

令和七年 元旦



貫首	旭 日重
参 与	井野上正文
参 与	上杉清文
参 与	保田義彰
一 老	坪井親雄
執 事 長	鈴木春雄
経 理 部 長	川上義宣
法 要 部 長	井野上正俊
布教伝道部長	佐野湛要
役 課 一 同	

年頭の御挨拶

執事長

鈴木 春雄



日興上人第七百遠忌(令和十四年正当)をお迎えする為の準備を重ね、本年より遠忌事業の実動に入りました。

この御遠忌は塔中・末寺に

令和七年乙巳歳
新春を迎え謹んで

新年のご挨拶を申し上げます

昨年は新型コロナウイルス感染症が五類感染症に移行され、少なからずとも安堵されたかと思えます。ですが油断は禁物であります。

国内外に目を向けますと、各地で戦争・内乱・飢饉・大地震・気候異変等の様々な出来事が毎日のように起きています。更には政治不信・経済不安等の混乱する時代が続いています。

時はまさに、日蓮大聖人が御示しにられた末法の世であります。この苦から救うところの正法を建て、大慈大悲の南無妙法蓮華經の良薬をお与えくださりましたことに、日々の本山晨朝勤行を通じて感謝している次第であります。

さて、本山では令和四年より高祖日蓮大聖人第七百五十遠忌(令和十三年正当)、御開山白蓮阿闍梨

とつて大変重要な意義を持つ大事であることを御自覚いただきたく存じます。

殊に各聖に於かれましては、現代社会において薄れゆく本化の信仰を取り戻す為、『信仰の再結縁』を指針とし、日蓮大聖人が日興上人に御遺命された本門戒壇可建道場を中心とし、檀信徒の御教化に獅子奮迅を願うばかりです。

また、貫首猊下御教示の下、役員一体となり猊下をお支えし、檀信徒の皆様が、御本山でお唱えする南無妙法蓮華經が心の良薬であり続けるよう道場を莊厳し精進してまいります。

どうぞ本年が皆様方にとつて安穩な日々でありますことをお祈り申し上げます。おもしろの森より新年の挨拶と致します。

南無妙法蓮華經

初 御 講

日 時 令和7年1月13日(月) 午後2時30分より

新年を迎えての御命日忌(大聖人の御命日13日)である初御講を厳修致します
ご参詣お焼香くださいますようご案内申し上げます

節分追儺会 (法要後 豆撒き)

日 時 令和7年2月2日(日) 午後2時00分より

厄年・年男・年女の方の特別祈願、または諸祈願も受け付けております
法要後 除厄開運の豆撒きを行います。一般の方々も是非お参り頂き
豆撒きにご参加下さい

御開山日興上人会(第693回忌)

日 時 令和7年2月7日(金) 午前11時00分より

開山日興上人の御命日忌にあたりますので、ご参詣お焼香ください

法華經に学ぶ 第二十九回
布教伝道部 浦野 弘正

無量義②

今回は「無量義」を私たちの現実に当てはめて考えるところから始めます。

ある大学の教室に、百人くらいの学生さんが集まって、同じ授業を受けているとしましょう。

同じ授業を受けていても、その大学に入るまでの経歴は千差万別です。高校から現役で合格した人もいれば、浪人を経験した人、あるいは社会人経験を経て入学した人もいます。それも、若くして再入学したり編入学した人もいれば、定年退職を機に学問を志した人もいるかもしれません。日本人だけでなく海外からの留学生もいます。さらに家族構成や出身地、住まいの環境、趣味や嗜好を考えると、本当にみんなバラバラです。もつと言えば、同じ授業を受けていても理解度も違えば、そもそも授業に対する集中の度合いも違います。でも、その時は同じ教室で同じ授業を受けています。

学生さんたちを「それまでの教え」、教室での授業を「一心」と考えると、「無量義」とは「宇宙のように際限のない存在が、ほんの一瞬の私たちの心の動きの中にある」ことを指していることがお分かり頂けるかと思えます。

説法瑞の重要性

「教菩薩法」「仏所護念」「無量義」の三つの大事な言葉をご説明しましたので、説法瑞の話に戻ります。

以前お話したように、『無量義經』『法華經』『觀普賢經』を合わせて「法華三部經」と呼び、『無量義經』は「開經」に位置付けられていますので、法華經が説かれる前に無量義經が説かれるのは必然なのです。裏を返せば、無量義經が説かれない限り、法華經は説かれないのです。

したがって、無量義經が説かれることを「説法瑞」と呼んで「此土六瑞」の一番めに数えます。

補足〜四衆について

さて、先ほど、「四衆」という言葉が出てきたので少し補足します。

「四衆」といつたとき、普通は「比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷」という、出家した男性と女性、在家の男性と女性の、四種類の人々を指しますが、他にも三種類の四衆があります。他の二つは割愛しますが、ここで指す四衆は「發起・影響・当機・結縁」の四衆と考えられています。

前者は、出家しているかどうか、男性か女性かという分け方ですが、後者は、聴聞者の性質に応じての分け方です。

發起衆

「發起衆」とは「お釈迦様に教えを説く

きっかけを作る者」で、法華經においては、この後に出てくる文殊菩薩さまや弥勒菩薩さま、「どうか私たちの為に一番大事な教えをお説き下さい」とお願いされた舍利弗さまがこれにあたります。

影響衆

「影響衆」とは「影になる者」「響かせる者」という意味で、お釈迦様の影となり、またお釈迦様の発したお声が響く者をいいます。このことから転じて「他所からやってきて、仏さまが教えを説き人々を導くにあたって助ける者」をいいます。法華經の中では見宝塔品において、多宝塔の中から「あなたが説いた教えは全くその通りなのだ」と褒め称える「多宝如来さま」が代表格といえます。

当機衆

三つめの「当機衆」とは「まさに機にあたる」人たちで、この法華經が説かれることで、覚りを得て修行を完成させることができようになる人たちをいいます。十大弟子を始めとするお釈迦様のお弟子方は、このあと迹門で、教えを聞くことによつて次々と成仏の保証である「記莖」を授かります。この人たちが「当機衆」にあたります。

結縁衆

最後の「結縁衆」は、「この時初めてお釈迦様の一番大事な教えに触れて縁を結ぶ者」を指します。(続く)

『本門要軌』を読む 第二十八回

布教伝道部執事 阿部 和正

聖愚問答鈔 (聖壽四十四歳 文永二年)

所謂諸仏の誠諦得道の最要は只是妙法蓮華經の五字也。檀王の宝位を退き、竜女が蛇身を改しも只此五字の致す所也。夫以れば今の經は受持の多少をば一偈一句と宣べ、修行の時刻をば一念隨喜と定めたり。凡そ八万法藏の広きも、一部八卷の多きも、只是五字を説かんとため也。靈山の雲の上鷲峯の霞の中に、釈尊要を結び地涌付囑を得ることありしも、法体は何事ぞ只此要法に在り。天台・妙楽の六千張の疏、玉を連ぬるも道邃・行滿の數軸の釈金を並るも、併がら此義趣を出す。誠に生死を恐れ涅槃を欣い、信心を運び渴仰を至さば、遷滅無常は昨日の夢、菩提の覺悟は今日のうちつたるべし。只南無妙法蓮華經とだにも唱え奉らば、滅せぬ罪や有るべき、来らぬ福や有るべき。真實也。甚深也。是を信受すべし。

聖壽 〓 宗祖の執筆年齢四十四歳。系年は文永二年(一二六五) 〓 『昭和定本日蓮聖人遺文』三八六頁ですが、近年の研究では偽撰遺文とされ、系年及び対告者は不明。真蹟及び上代写本は伝来しません。當文は宗門に於ても、御書要文中の得道最要の文として『宗定日蓮宗法要式平成版』(「第

四篇要文選集」三六九―三七〇頁)に収録されており。當書の構成は上下二卷。愚人と聖人の問答形式で、愚人は小乗教より次第に法華經に至り、終には法華經の要法五字の信受に至るといふ概略です。『本門要軌』中の同文は、法華經修行の肝要 〓

妙法蓮華經の五字であることが明かされる部分であり、信行要文として広く用いられております。略訳をしますと、いわゆる諸仏の誠諦得道(真實の覺りを得る為)の最要(肝要の法)は只是妙法蓮華經の五字也。檀王(須頭檀王へすずだんのう)の宝位を退き(『提婆達多品第十二』釈尊の過去世。王位を捨て千年が間、阿私仙人へあしせんにん)に給仕し佛と成る)竜女が蛇身を改し(『提婆達多品第十二』八歳の竜女の成仏)も只此五字の致す所(妙法蓮華經の五字に依るもの)也。夫以れば今の經(『法華經』)は受持の多少(經文の長さ)をば一偈一句と宣べ、修行の時刻(所要時間)をば一念隨喜と定めたり(『法師品第十』聞妙法華經・一偈一句・乃至一念隨喜者・我皆與授記・當得阿耨多羅三藐三菩提)。凡そ八万法藏の広き(仏の広大な教え)も、一部八卷の多き(法華經の多大な教え)も、只是五字を説かんとため也。靈山の雲の上鷲峯の霞の中(靈山虚空會上)に、釈尊要を結び地涌付囑を得ること(『如来神力品第二十一』本佛が法華

經の本法を四句の要法に結び、本化地涌の菩薩に特別付囑をする)ありしも、法体(法の実体)は何事ぞ只此要法(妙法蓮華經の五字)に在り。天台・妙楽の六千張の疏、玉を連ぬる(天台大師・妙楽大師の玉を連ねたような六千帖の注釈疏)も道邃・行滿の數軸の釈金を並ぶる(道邃・行滿の黄金を並べたような解説書)も、併がら此義趣(すべてはこの趣旨)を出す(越えるものではない)。誠に生死を恐れ涅槃を欣い(求め)、信心を運び(励み)渴仰(佛の渴仰)を至さば、遷滅無常(生死流轉の無常)は昨日の夢、菩提の覺悟は今日のうち(現実と)なるべし。只南無妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば、滅せぬ(消滅せぬ)罪(罪障)や有るべき、来らぬ福や有るべき。真實也。甚深也。是を信受すべし。以上文の前半部は、四讚歎の御義口伝(『本門要軌』七一―九頁)の文に付随し、佛の一切の教え・法華經一部八卷も、総て妙法五字に帰結し、法華經の修行の肝要は、妙法蓮華經の五字にあることを明かされております。つまりは**本門題目の受持**が説かれております。後半部は、前回の立正安国論(『本門要軌』六五―六六頁)や、二道場觀(『本門要軌』二―三頁)の文に符合してあります。衆生が**本門戒壇に安住**した際の境地が説かれております。(続く)

初御講について

初御講は新年最初の一月十三日、日蓮大聖人の御命日に合わせ本堂にて読経、御題目を御唱えし、大聖人の御恩に感謝申し上げる法会です。

御講とは本来講義、講読の講で寺院内で仏典を講読、研究する僧侶の集まりを示すものでしたが、やがて仏事をさす言葉になり、現在では行事などを意味する言葉となりました。本門寺において新年最初の年中行事となる初御講、新たな年を迎えるにあたり本年もより良い年になるよう大聖人へ御報恩の志を手向け、一年の抱負を御誓いしましょう。



開山会について

開山会とは法華本門寺根源を開かれた日興上人の命日を偲び御供養する法会です。

日蓮大聖人は晩年六老僧（六人の弟子）を定めました。その中でも大聖人と多くの時間を過ごされ、大聖人の想いを理解し、御遺文を一番多く書写した唯授一人の弟子が日興上人です。

日興上人も日蓮大聖人に習い六人の弟子（本六）を定めます。その後、新たに六人の弟子（新六）を定め、日蓮大聖人の教えを広め本門の

戒壇建立の誓願を後世に託しました。これは大聖人への報恩感謝の念がうかがえます。

又日興上人は本門戒壇道場の建立の地を探すにあたり、大石ケ原に草庵（現東光寺）を建て五年間を過ごされました。思念思惟の上、重須の地頭石川孫三郎能忠、小泉法華講衆等の合力を得て、この重須の地に本堂、御影堂、垂迹堂の三堂を建立し本門戒壇建立誓願の地として、この法華本門寺根源を御建てになりました。



日興上人は当寺で遷化



されるまで三十六年間、日蓮大聖人の教え、法華経弘通の為、弟子の育成を行いました。

どうぞ皆様、日興上人の偉大な功績を偲び、御題目を御唱えし、御一緒に御供養致しましょう。

開山会は、開山堂での法要となります。令和十四年の日興上人第七百遠忌に向け、ほどなく日興上人御尊像は修復を行います。現在の御尊像に手を合わせられる数少ない機会となりますので是非とも御参詣下さい。

日時 二月七日 十一時
場所 本門寺根源 開山堂

重要なお知らせ

平素より『おもしろ森』をご愛読頂きまして誠にありがとうございます。

『おもしろ森』はこれまで毎月発行目録としてお届けさせて頂いておりましたが、郵便料金の値上げ並びに編集作業等の諸事情により、令和七年四月より、年四回の季刊号として発行致します。発行予定月は左記の通りです。

- 一、新年号（十二月下旬）
- 二、春号（三月初旬）
- 三、お盆号（六月下旬）
- 四、御会式号（十月初旬）

多部数購読の寺院様には改めて年間購読料のご案内を致します。

ご理解の程、何卒宜しくお願ひ申し上げます。

執事長 鈴木春雄

弘法寺・龍口寺 団参

十一月十八日(月)、本山真間山弘法寺貫首鈴木日晋、龍口寺貫首鈴木日沾、一行十八名が当山にお参りくださいました。

殊に真間山弘法寺は六老僧日頂上人の御開山であり、山内正林寺にその御廟を格護し、当山とも深い縁のあるお寺でございます。

今回、龍口寺様とご一緒に生御影尊に法味言上され、その後、境内諸堂等のご説明をさせて頂きました。



教学研修会 開催

十一月二十一日(木)、今年最後となる末寺・興統法縁会・重須会教師向けの教学研修会を開催致しました。

本間俊文先生による「日興上人入門」第七講【日興上人自筆史料の再確認】を主題としてこの度もご講義を頂きました。日蓮大聖人御在世当時、日興上人は筆跡沙門として、大聖人の書籍類を写し、現在数多くの写本が残されています。滅後には、日興上人も沢山の御本尊を染筆し弟子檀越に授け、今日現存する御本尊は三百十幅にも及ぶことを紹介頂きました。

【御願い】

遠忌事業の一環として令和五年度より開催しております教学研修会も二年が経ち内容も益々充実してきております。質疑応答も活発に交わされております。ことに日興上人の講義については文献が少ないうちの興味深いテーマであります。是非一人でも多くの教師の方々に聴講頂くことを願っております。



新寂回向事務局より

御本堂におきまして、各御霊位の御回向を申し上げます。

- 蓮行坊 故 遠藤 牧男 様
 - 養運坊 故 佐野 アヤコ 様
 - 養運坊 故 金森 弘 様
 - 養仙坊 故 太田川 糸子 様
 - 養仙坊 故 湯本 良子 様
 - 養仙坊 故 市川 敦子 様
 - 久成寺 故 榎林 敏光 様
 - 養運坊 故 伊藤 須美子 様
 - 養運坊 故 保坂 武人 様
 - 久成寺 故 畑中 義夫 様
 - 久成寺 故 堀内 紀子 様
 - 蓮妙寺 故 堀江 敏正 様
 - 蓮妙寺 故 平本 文壽 様
- 十二月四日迄 申込み・申請順
ご冥福をお祈り申し上げます

護山志納金の報告

護山志納金をお納め頂き、厚く御礼申し上げます。左記に、掲載し、ご報告申し上げます。

- 令和六年度分 十一月 塔中 養運坊 様

塔中護山志納金の報告

塔中様におかれましては護山志納金をお納め頂き、厚く御礼申し上げます。左記に、塔中名を掲載し、ご報告申し上げます。

- 令和六年度分 十月・十一月 塔中 養仙坊 様
- 塔中 養運坊 様

本門寺の主な予定

- 令和六年十二月 十三日 役課・婦人会大掃除
- 二十日 提灯取付(雨天翌日)
- 二十五日 重須婦人会清掃奉仕
- 三十一日 大晦日・新年祝禱会

令和七年一月

- 七日 日黒常円寺 団参
 - 八日 日提灯片付(雨天翌日)
 - 十一日 石川講
 - 十二日 富士圓妙寺 団参
 - 十三日 定例会・重須会総会
 - 十三日 初御講
 - 二十四日 三輪是法先生勉強会
- 令和七年二月
- 二日 日節分追儺会 豆まき
 - 七日 日御開山日興上人会

丹精者 御芳名

- 香華・その他 供養
- おもすの森 賛助金
- 北山 榊原しげ子 様
- 献花
- 北山 星谷とみ子 様
- 諸堂・境内清掃・作業奉仕
- 本門寺内 重須婦人会 様
- 塔中 寺庭婦人 様
- 本門寺内 石川由緒家 様
- 北山 望月 正見 様
- 静岡市 紺文シルク 様
- 謹んで御礼申し上げます